

令和 6 年 5 月の解説（府県天気予報）

【5 月の天候状況】

上旬は、天気は数日の周期で変化した。全国的に低気圧や前線の影響を受けにくく、高気圧に覆われやすかったため、旬降水量は北日本太平洋側と東・西日本日本海側で少なく、旬間日照時間は北・東日本日本海側、北・東日本太平洋側、沖縄・奄美で多かった。一方、期間の中頃には北日本付近を低気圧が、北・東・西日本付近を前線が通過し、全国的に曇りや雨の所が多くなり、西日本太平洋側を中心にまとまった雨が降った日があった。気温は、期間の中頃を中心に全国的に暖かい空気に覆われ、平年を大きく上回った時期があった。一方、期間の終わり頃には低気圧通過後に寒気が流入し、西日本を中心に北・東日本でも気温が平年を大きく下回った。このため、西日本で旬平均気温は低かった。また、7 日から 8 日にかけて北海道地方で雪が降った所もあった。沖縄・奄美では期間を通して暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は高かった。

中旬は、日本付近は低気圧や前線と高気圧が交互に通過し、天気は周期的に変化した。低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込みやすかった。一方、低気圧や前線の後面には寒気が流れ込む時期もあった。旬平均気温は、寒気の影響を受けにくかった北日本でかなり高く、東日本で高かった。北日本では、旬平均気温平年差が $+3.3^{\circ}\text{C}$ と、1946 年の統計開始以降、5 月中旬として 1 位の高温となった。旬降水量は、低気圧や前線の影響を受けやすかった北・東日本日本海側と東日本太平洋側で多かった。一方、高気圧に覆われた時期もあったことから、旬間日照時間は西日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側と北日本太平洋側で多かった。

下旬は、北・東・西日本では天気は数日の周期で変わった。27 日から 28 日にかけては、低気圧や前線の影響で、東・西日本を中心に記録的な大雨となった所があった。このため、旬降水量は東日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多く、東日本太平洋側と北・西日本日本海側で多かった。また、旬間日照時間は北・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で少なかった。一方、21 日頃に梅雨入り（速報値）した沖縄・奄美では、梅雨前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、前線の活動が活発となった 21 日から 22 日にかけてと 28 日には大雨となった所があった。このため、沖縄・奄美は旬降水量がかなり多く、旬間日照時間がかなり少なかった。特に旬間日照時間平年比は 41%で、1961 年の統計開始以降、5 月下旬として 1 位の寡照となった。旬平均気温は、暖かい空気が流れ込む日もあったため、東日本と沖縄・奄美で高かった。

【5 月の検証結果】

17 時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報は例年値（注）より 3 ポイント高い 89%で、明後日予報は例年値より 5 ポイント高い 87%でした。地方別の適中率では、明日予報は、全ての地方で例年値と同じか例年値を上回りました。また、明後日予報は、全ての地方で例年値を上回りました。

同じく 17 時発表の天気予報による明日の最高気温の予報誤差は、全国平均で例年値より 0.5°C 小さい 1.4°C で、全ての地方で例年値と同じか例年値よりも小さくなりました。また、最低気温の予報誤差は、全国平均で例年値より 0.3°C 小さい 1.1°C で、すべての地方で例年値と同じか例年値よりも小さくなりました。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【7月の天気予報の利用にあたって】

平年では、7月の中旬～下旬に、九州地方から東北地方にかけて梅雨明けとなり、梅雨明け後は本格的な夏が始まります。しかし、7月は梅雨末期の大雨が起こりやすい時期でもあります。早期注意情報(警報級の可能性)や最新の気象情報、警報・注意報、キキクル(危険度分布)などに留意してください。